

Jacqueline L. Stone 著

Right Thoughts at the Last Moment: Buddhism and Deathbed Practices in Early Medieval Japan

ロバート F. ローズ

この数年来、どのようにして死と向き合うかという課題が、様々な形で論じられている。仏教の世界でも死をテーマとする優れた研究が次々と発表されている。この問題は日本だけではなく、欧米でも注目を引き、多くの研究が精力的に発表されている。その成果として *The Buddhist Dead: Practices, Discourses, Representations* (Bryan C. Cuevas・Jacqueline L. Stone eds, University of Hawaii Press, 2007) と *Death and the Afterlife in Japanese Buddhism* (Jacqueline L. Stone・Mariko Namba Walter eds, University of Hawaii Press, 2008) の二冊が *Bonds of the Dead: Temples, Burial and the Transformation of Contemporary Japanese Buddhism* (Mark Rowe, University of Chicago Press, 2011) などの示唆に富む研究が相次いで出版されているが、本書は *The Buddhist Dead and Death and the Afterlife in Japanese Buddhism* の編集に携わったプリンストン大学のジャクリン・ストーン教授が日本仏教における臨終行儀についてまとめた、五九七頁に及ぶ意欲的な研究である。

ストーン教授は日本中世仏教を専門として、本覺思想について包括的に論じた優れた研究書である *Original Enlightenment and the Transformation of Medieval Japanese Buddhism* (University of Hawaii Press, 1999) の著者として

知られている。今回は仏教の思想研究からやや離れ、仏教の実践的側面に目を向けて、中世における臨終行儀を取り上げている。本書のタイトルである *Right Thoughts at the Last Moment* (最後の瞬間での正しい思い) は、いうまでもなく、浄土往生に不可欠と考えられていた「臨終正念」を英語で表現した言葉である。臨終行儀といえば、慧心僧都源信(九四二—一〇一七)が深く関わっていた比叡山横川の二十五三昧会が有名であるが、ストーン教授は二十五三昧会のみならず、それ以降の臨終行儀の発展に注目して、臨終行儀の風習が消滅する十九世紀末までの歴史を宗教学の視点から叙述して、臨終行儀にまつわる様々な問題を幅広く検討している。このような包括的研究は他には類を見ず、今後の日本仏教研究の進展に大きく貢献するであろう。

Introduction (序論)

1. The Beginnings of Deathbed Practice in Japan (日本における臨終行儀の始まり)
2. A Realm Apart (別の世界)
3. Exemplary Death (模範的な死)
4. Interpreting the Signs (奇瑞を解釈する)
5. Anxieties (不安)
6. Deathbed Attendants (臨終の付添者)
7. The Longue Durée of Deathbed Rites (臨終行儀の長期的展開)

Conclusion (結語)

Appendix: Annotated Bibliography of Deathbed Manuals (付録—臨終行儀書の注釈付き文献目録)

また巻末には四〇頁近い詳しいビブリオグラフィーが付されている。

ストーン教授は序論のなかで、本書の目的は日本における臨終行儀にまつわる言説と実践の発生と展開を、十世紀後半から十四世紀初頭を中心に考察することであると述べている。この時代の人々は臨終の一念が死後の行き先を決定すると考え、諸仏・菩薩の浄土に往生することを目的として臨終に正念を維持できるように様々な臨終の儀式・儀礼を作成した。多くの場合、死後に往生を求める世界は阿弥陀仏の西方浄土であったが、それ以外にも弥勒菩薩の兜率天や観音菩薩の補陀落浄土、または法華経に説かれる靈山浄土が往生の対象として考えられていた。しかし、どの世界に往生するためにも、臨終の正念は不可欠な条件として考えられていた。そのため、臨終行儀の思想と実践は宗派の壁や出家・在家の隔たりを超えて、様々な人々のあいだで受容されていったのであった。

第一章「日本における臨終行儀の始まり」では、初期の臨終行儀を取り上げている。ここでは永観二年（九八四年）から寛和二年（九八六年）のあいだに、臨終行儀の発展に決定的な影響を与えた三つの重要な出来事があったことが指摘されている。それらは（一）慶滋保胤による『日本往生極楽記』の撰述、（二）慧心僧都源信による『往生要集』の撰述、（三）二十五三昧会の結成であった。『日本往生極楽記』は日本で最初に著された往生伝として有名であるが、そのなかに収められている伝記では臨終の場面が多く語られており、そこに説かれている臨終の姿は浄土往生を願う人々の模範となる理想的な死の有様を示すものとして重視され、後代に大きな影響を与えた。また『往生要集』の「別時念仏」では臨終行儀について詳しく述べており、これも日本浄土教における臨終行儀の発展で重要な役割を果たした。さらに二十五三昧会は、源信を含む天台宗の僧侶の念仏結社であるが、その活動の一環として実践されていた臨終行儀は、後代の臨終行儀の模範となった。このように、これら三つの出来事は日本における臨終行儀の展開に大きな影響を与えることとなった。

第一章の後半では、日本浄土教に関する従来の見解を問い直す、いくつかの注目すべき指摘がなされている。たとえば従来の研究では、浄土信仰は末法思想の発展に刺激されて広まったとされてきたが、ストーン教授はこのような

見解に疑問を呈し、浄土教と末法思想は必ずしも最初から不可分な関係にあったのではないと論じている。その根拠として、源信の『往生要集』の有名な序文に注目している。周知のように、『往生要集』の序文では、末法の時代には（実は序文では「末法」とはいわず、「濁世末代」とあるが）「道俗貴賤、誰が帰せざらん者あらん」と述べているが、興味深いことに序文以外では、末法に言及することはない。これは末法思想が当初から浄土信仰と密接に関わっていたのではないことを示唆している。末法思想が浄土教思想を不可分な関係を持つようになるのは、法然の専修念仏思想が確立してからであろうとストーン教授は推測している。また十世紀に浄土教が発展した背景には、当時の仏教の腐敗や衰退への批判があったとする見解も先行研究には見られるが、ストーン教授が述べているように、当時の仏教は衰退しているどころか、制度的には様々な革新的試みが行われていた時代であった。そのため浄土教の発展を単に当時の仏教の在り方に対する批判的態度に求めるのは不十分である。さらに浄土往生を求める人々のあいだでは、仏頂尊勝陀羅尼や光明真言も用いられていたこともあり、浄土往生の行は決して称名念仏に限られていなかったことも述べられている。

以上のように第一章で初期の臨終行儀について論じたうえで、続く各章では中世の臨終行儀について様々な角度から検討が加えられている。第二章「別の世界」では往生の対象となる浄土が取り上げられている。ここでストーン教授は、「厭離穢土・欣求浄土」という言葉が端的に示すように、この世に対して否定的な態度を取る点が浄土教の大きな特徴とされてきたが、このような態度は浄土教のなかでも決して一般的ではなかったと論じている。浄土経典がすべて厭離穢土の思想を説くわけでもなく、また平雅行教授が述べているように、平安時代において宗教に求められたのは二世の安楽（現世での様々な世間的利益と来世での浄土往生）をもたらすことであり、現世利益と浄土往生は決して矛盾するものとして考えられてはいなかった。しかし、厭離の思想が従来の研究では過度に強調されていたことを指摘しながらも、厭離穢土の態度は中世の文献には多く見られ、当時の人々に広く受け入れられていたことも事実で

あったことも述べられている。

またこの章では、中世における浄土と浄土往生の理解に関するいくつかの興味深い課題が取り上げられている。たとえば、浄土はこの世からあまりにも遠く離れていると考えられていたため、浄土を「近くに引きよせて」(‘closer to home’)、より親しみを持たせる方策が取られたことが指摘されている。この時代には実在する場所を浄土と見なす思想が芽生え、難波の四天王寺は浄土の東門であるとする考えや、高野山を阿弥陀仏の浄土や弥勒菩薩の兜率天と同一視する考えなどが生まれた。このような考えが普及するにつれて、四天王寺や高野山は多くの人々を引きよせる巡礼地へと発展していった。その一方で、天台宗や真言宗では穢土と浄土とは不二であると主張も現れ、浄土はこの世に内在するという思想も広く受け入れられるようになった。

さらに第二章では浄土の衆生についての議論も紹介されている。浄土経典ではしばしば浄土に往生した人々は平等で差異がないことが力説され、浄土の衆生の肌はみな金色で、その身は平等に三十二相で莊嚴されているなどと説かれているが、平安時代の文献を読むと、当時の人々は往生した後でも、夫婦や親子といった現世的人間関係は存続すると信じて疑うことはなかったようである。これは經典の言説と一般信者の考えが、必ずしも一致していなかったことを示すとともに、浄土に行けば無き親や夫・妻に再会できると信じていることよって、死の悲しみを緩和し、「絶対的な断絶である死を根源的に相対化する」(二〇一頁)働きがあったとストーン教授は論じている。

仏教教義と一般の理解との隔たりは、女人往生に関しても見られる。浄土経典では女性は女性の身を以て浄土に往生することはできないとされているが、平安時代の一般信者は、女性は女性のままで浄土に往生することを疑わなかった。それを示す有名な例として、『源氏物語』のなかで光源氏が死後に紫の上と共に一蓮托生して浄土に往生したいと願っていることが挙げられる。源氏が浄土で再開を願っていた紫の上は、女性としての紫の上であったことはいうまでもない。しかし、浄土で愛する人と再会することは、この世での関係をそのままの形で継続するのではなく、

より高い次元で（例えば性的関係などを超越した次元で）再現することでも重要である。

第三章「模範的な死」では、平安時代の往生伝や他のテキストに描かれている理想的な死の姿が取り上げられている。ここでは臨終を目前にした人々が、いかに自らの死に備えたかが記されている。多くの場合、彼らは戒を受け、臨終を迎えるために特別な空間である無常院へと移動して、精神的・身体的ケアを受けながら死に向き合った。これに関連し、先行研究では、通常の住居では思い出の品など執着の対象が多く、最後の一念に集中できないから、病人を往生院に移す必要があったとする見解が多く見られるが、ストーン教授は死の穢れを避けることも大きな要因であったのではないかと推測している。死穢に染まると、当時は三十日にも及ぶ長い期間、神事に携わることや宮中に出仕することができなくなった。そのため、臨終に際して病人を日常生活から離れた空間に移す必要があったと考えられる。

さらにこの章では、臨終の際に用いられた仏像・絵図や仏像と病人をつなぐ五色の糸、臨終の正しい身体的姿勢など、臨終行儀に関する具体的なことがらが詳しく紹介されている。そして最後に、臨終行儀には決まった形はなく、信仰の対象に応じて様々なヴァリエーションがあったことも指摘されている。多くの場合、阿弥陀仏の浄土への往生が願われていたため、念仏が臨終行儀の中心に位置付けられていた。しかし、法華経の行者の場合には、法華懺法などが臨終行儀の中心をなし、時には弥勒念仏や陀羅尼の読誦も行われたことが知られている。

第四章「奇瑞を解釈する」では、臨終の奇瑞（紫雲、音楽、夢告など）について論じられている。死後の往生を得るためには、正念をもって臨終を迎えることが不可欠であると信じられていたが、死者が実際に臨終に正念していたかは、当然のことながら本人以外にはわからない。そのため、臨終の奇瑞が死者の往生の証として重要な意味を持つようになった。つまり、「社会的事実としての往生は、生きている人々のコンセンサスによって決定される」ために、「往生には多大に社会的な側面がある」（一八二頁）のである。往生したか否かは、臨終を見届けた人々によって決定

されるというこの指摘は重要である。また死者が浄土に往生したか否かを決定するために、夢告が重要な役割を担っていたことは注目すべき点である。そのため第四章では、これらの夢告の内容や、どのような人々が夢告を受けたかなどの点が詳しく考察されている。(多くの場合、夢告を受けるのは同行者や親族であったが、死者と全く関係のない人が夢告を受けることもあった。) また、時に夢告は、特定の教団の開祖の權威を裏付け、開祖が広めた特定の行の正当性を保証するために用いられたことも論じられている。さらに結縁のために臨終に近い行者を訪ねる信者や、臨終の時刻を前もって公表し、群衆の前で往生する行者などについて、興味深い考察がなされている。

第五章「不安」は、本書の中でも最も興味深い一章である。ここではストーン教授が「模範的な死の『闇の部分』」(“the dark side of the ideal of exemplary death”)と呼ぶ臨終行儀の一面について考察している。正念を以て臨終を迎えれば往生を得ることができるという考えが普及すると共に、逆に死に直面したときに正念を維持できるかどうかという不安を懐く人々も増加した。このような不安は僧侶や貴族のあいだでは十一世紀から十二世紀にかけて見られるようになり、十三世紀になると社会全体へと広まった。この章では、臨終行儀関連の文献に説かれている臨終正念を妨げる様々な事柄(そのなかには念仏者自身の執着心や魔の妨害行動、さらには付添者の雑談などが含まれている)が取り上げられている。また往生を確実にするため、より多くの功德を積もうとして、念仏や陀羅尼、あるいは種々の經典などを何千回、何万回も称えようと努める傾向がこの時代には見られるが、これも臨終に正念を保てるかという不安の現れであるとストーン教授は指摘している。

第六章では、従来あまり注目されてこなかった「臨終の付添者」(deathbed attendants)に焦点を当てて詳しい検討がなされている。これらの付添者は善知識と呼ばれていたが、彼らはいわば臨終行儀のスペシャリストとして、臨終に付き添い、身体的・精神的ケアを施し、正しい形で最後を迎えられるよう助言と支援を行っていた。また善知識の仕事を助けるため、多くの臨終行儀書(ストーン教授はこれらを「臨終のマニュアル」と呼んでいる)が作成された。本書

の付録では、十八の臨終行儀書の内容が紹介されているが、ストーン教授はこれらによって、善知識の役割を丹念に解明している。その役割のなかには無常院の準備、看護、念仏などの勸進、正念を妨げる妄念や魔の妨害行動の除去、看取りや葬式などが含まれていたことが示されている。

最後の第七章「臨終行儀の長期的展開」では、鎌倉時代から臨終行儀が消滅した十九世紀末までが取り上げられている。鎌倉時代には武士の臨終が多く語られるようになり、法然の浄土宗や親鸞の浄土真宗、さらには禅宗でも正しい臨終の在り方が論じられるようになった。これらの点や、鎌倉以降の臨終に関する言説も、この章で詳しく取り上げられている。

以上のように、本書は臨終行儀の歴史を、平安時代に焦点を当てながらも、それ以降の時代にも目を配りながら包括的に論じている点に大きな特徴がある。また善知識の役割など、従来の研究では見逃されていた点も紹介され、臨終行儀に関する新しい知見も提供している。本書は今後の日本仏教の研究に大きく貢献する重要な研究である。

2016発行・University of Hawai'i Press

xviii + 597 pp.

ISBN 978-0-8248-5643-4